

これまでも穴を掘る機会は数多くあったし、なんせ川と池を掘ったこともある。少々、石があってもそれをスコップで彫りあげることも慣れてきていた。ところが駐車スペースは碎石を一メートル近く積み上げたところで、とにかくスコップが刺さらない。たまたま妻の実家の物置を片付けた時に出てきたツルハシを興味本位でもらってきたのが役にたった。これが無ければブドウの生垣は諦めていたことだろう。

まず、生垣の大きさを決めなければならないのだが、ブドウを植える間隔は二メートル。少なくとも一・五メートルは必要ということだったのと、碎石を積んだところとそうでないところの高低差を行き来しやすいように駐車スペースの中間に階段をつくっていたことから、必然的に六メートルというあまり長くないものに落ち着いた。幅は根をそこそこはれるスペースを確保すると六センチメートルということだった。深さは四十センチメートル。体積にすると一・五立法メートル程度なのだが。

しつかり踏み固めた碎石を掘るのは容易ではない。まず、ツルハシを打ち込み固まった碎石をほぐしていく。それをスコップですくっていく。それを何度も何度も繰り返し返して穴にしていくという地道で力のある作業だ。「ブドウの生垣、ブドウの生垣」と念仏のように唱えながらひたすらツルハシをふるいスコップですくっても、なかなか穴らしい深さになってこない。でも、こういう作業は塵も積もれば山となるの言葉通り、いつかは目標に達する。わたしが長年かわってきたまちづくりなどは、確実に一步一步進むということは殆どなかった。いろいろな要素が複雑に絡み合い、目指す目標に向かって努力はしても進んでいるのか、足踏みしているのか、はたまた後退してしまっているのかはつきりしないことも多くあった。それに比べると、その都度の成果は微々たるものだけれど、それを黙々と繰り返し返すことによつて着実に目標に近づいてくるのを目にすることができるのは快感でもあった。体力的に半日作業を限度としたが、それでも一日五十センチメートルくらいの長さの穴が掘れる。二日で一メートル。休みも入れて一週間でなんとか目標の大きさの穴を掘りあげることができた。

つぎは、その穴に水はけの良い火山礫と、黒土と腐葉土を混ぜながら埋めもどす作業になる。腐葉土はホームセンターで買ってくればそれまでだが、なんせ敷地にはタダで積もっている落ち葉が膨大にある。それをかき集めて運んで埋める作業を繰り返し返す。掘るのもたいへんだけど、埋めもどすのも結構体力を使った。それでも雪が降るまでにはなんとかブドウの苗を植ええられる環境が整ってきた。あとは、頒布会のある来春のゴールデンウィークを待つだけだ。

妻はブドウの生垣をつくるのにさほど反対はしなかったが、どうせ碎石だらけのところはブドウを植える穴を掘れるとは思っていなかったのかもしれない。それでも、「これで、我が家はお金がなくなってもお酒には不自由しないよ」と、つまらん冗談を言つて妻の気持ちが変わらないように祈っていた。

